



◆ 遺跡の位置

賚賓閣跡は、ひたちなか海浜鉄道湊線那珂湊駅の南方 600m の那珂川を見下ろす日和山(御殿山)と呼ばれる孤立丘陵に位置し、湊中央一丁目の湊公園内に所在しています。那珂湊駅から徒歩で約 15 分です。

日和山は厚い礫岩層が岩盤の標高 21m の台地で、北は遠くに阿武隈山地、東は太平洋、南は那珂川や涸沼川、西は筑波山や遠くに日光連山を望むことができます。

◆ 遺跡の由来・沿革

江戸時代には徳川氏が水戸に入り、水戸藩第 2 代藩主には「水戸黄門(中納言の唐名)」で有名な光圀公が就任しました。江戸時代以前に常陸国を支配していた佐竹氏の時代から、那珂湊には「御殿」と呼ばれた別荘が日和山北側の山下あたりに存在していましたが、光圀公の隠居後である元禄 11(1698)年に新たな湊御殿が日和山の中央部に建設されました。「賚賓閣」の名称は、光圀が命名したといわれ、中国の儒教の経典「書経」のなかの「堯じゅきやう典ぎやう」に由来しています。賚賓とは、「つつしんでみちびく」との意味で、賚賓閣は応接所の意味があります。

◆ 遺跡の規模・構造

賚賓閣については、江戸時代後期(天保期頃)に描かれた敷地及び平面間取り図(写)が 1 枚残っていますが、立面図や景観を示した絵図などは残念ながら残っていません。賚賓閣は、建設以後に建物や庭園の修理等が行われており、これがそのまま創建当時の状況を示しているとは言えないであります。

賚賓閣が位置している日和山は、東・南側は礫岩が露出する岩崖であり、北側は上部土層が崩れた崖で、西側は天満宮から華蔵院に至る急坂(七曲り坂)が通っており、さらに西方の台地が続いています。この図によると、このような地形の状態に応じて、北側は竹矢来状の囲、建物の近くは板塀で囲まれています。御殿敷地と庭園は芝を張り、南側に 2 つの築山があり、庭園内には遊歩道が設けられ、東方に御茶屋が建てられています。

台地北側の坂道を上った所に表門があり、さらに進むと西側に門があり、御式台から御殿に入るようになっています。御殿は東向きに建てられており、建坪は約 300 坪(約 1000 m²)で、一部は地形を利用した 2 重構造であったと推定されています。20 畳敷の御座間や御寝所をはじめ御小姓部屋や御医師部屋など大小 30 以上の部屋で構成されています。なお、第 9 代藩主^{なりあき} 斉昭公に登用された土浦藩士で農政学者の長島尉^{やすのぶ} 信が、天保 10(1839)年 6 月に^{なりあき} 齋賓閣を訪れた際の記録が残されています。

台地の東側突端部には異国(船)番所があり、囲いで庭園と仕切られています。また、御殿の北側に番所が 4 カ所あり、3 カ所は板塀の外側、もう 1 カ所は「帰り番所」で御殿に入る門の近くにありま

◆ 遺跡の性格・特徴

水戸藩は幕府^{じょうふせい}の定府制によって、藩主は参勤交代をせずに江戸(水戸藩上屋敷は小石川にあった)に定住し、国元の水戸に戻る場合には幕府の許可を受けて帰国しました。帰国(就藩、就国という)中に那珂湊を訪れる機会があり、その時に利用されるのが「湊御殿」、「湊別館」、「浜御殿」などとも呼ばれた水戸藩主の別荘・齋賓閣です。齋賓閣は、水戸藩主や水戸家の別荘・別館としての性格をもち、またその名のとおり、貴賓の接待や家臣への慰^{きゆう} 労などにも用いられました。光圀公が御殿入りする際には、華藏院、願入寺(大洗町)、六地藏寺(水戸市)、久^{きゆう} 昌寺(常陸太田市)等の近辺の住職などが招かれ、懇談・酒宴^{しいか}や詩歌の会が催されています。光圀公のほか、斉昭公などの歴代藩主も訪れました。

また、齋賓閣には海防館としての機能があったようで、異国船発見の際は、湊村をはじめ周辺の村々の中から選ばれた者が御殿へ詰めて海防に務めるよう通達が出されていました。

◆ 庭園の黒松

庭園内には、樹齢 300 年以上の枝振りの見事な黒松が生育しています。この松は、光圀公が御殿の庭園に植える^{すまあかし} ために、須磨明石(兵庫県明石市)から苗木を取り寄せたものといわれています。マツクイムシの被害等により名松が失われてしまった今日、非常に貴重な松といえます。

◆ 遺跡の現状

齋賓閣は、水戸藩最大の内乱である元治甲子の乱^{げんじかつし} (1864 年)で焼失し、その跡地は荒れ果てたままであったのを整備して、明治 30 年 4 月に「湊公園」として開園、市民に親しまれるようになりました。齋賓閣の跡地は、昭和 43 年 1 月に市の史跡「齋賓閣跡」として指定され、光圀時代に植えられた松の樹は「湊御殿の松」として、12 株が昭和 46 年 9 月に市の天然記念物に指定されました。